

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：16201  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2009 ～ 2012  
 課題番号：21520018  
 研究課題名（和文） 18世紀英国における、哲学の基礎論としての人間本性論における情念の役割の解明  
 研究課題名（英文） An Explication of the Role of The Theory of Passion in Science of Human nature as elements of Philosophy in the 18C Brithish Thoughts  
 研究代表者  
 石川 徹（ISHIKAWA TORU）  
 香川大学・教育学部・教授  
 研究者番号：30212848

研究成果の概要（和文）：18世紀英国の哲学を情念に関する理論を中心に検討した。検討の結果、ヒュームの情念論が彼の哲学の基礎理論というだけでなく、情念を巡る当時の議論に理論的な基盤を与えるものであることが判明した。彼は直感的な確信のみを最終的な根拠として戦われてきた利己主義対道徳感情論者の議論のための理論的基盤を提供したといえるのである。そして、ヒュームの批判者であるリードは、このような論争の外部からヒュームを批判することで、この主題の持つ可能性を示したといえることができる。

研究成果の概要（英文）：We examined some theories concerning passion in the 18c British philosophy. As a result, we observed that Hume's theory of passion is not only a foundation of his "Science of Man", but also gives a theoretical ground on which arguments between egoists and moral sentimentalists could be settled. These arguments depended upon sentiments of their own as final grounds. Hume provided common ground for discussing. And Thomas Reid criticized. Hume without those arguments, by this means he showed a vast range of this subject (passion).

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
21年度	1,100,000	330,000	1,430,000
22年度	600,000	180,000	780,000
23年度	600,000	180,000	780,000
24年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,800,000	840,000	

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学、イギリス哲学、情念論、人間本性論、ヒューム、リード、マンデヴィル、ハチスン

## 1. 研究開始当初の背景

哲学研究において情念は重大な主題であるにもかかわらず、情念そのものについての

研究は、必ずしも多いとは言えない。とりわけ18世紀の英国哲学に関して情念のみを取り上げて論じている研究は数少ない。研究

代表者はそれまでのヒューム情念論の翻訳及びその理論の内在的理解の研究を基礎にして、この欠落を埋められるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

近代の哲学は信仰が弱まるにつれ、理が哲学的探求の中心となってあらゆるものを理性的な探求の主題として進んでいく。そして、探求の進行につれて、「人間本性」こそが、諸々の学の基礎となる最も重要な主題であるという考えが一般的になっていく。その過程において理性と対立する情念がその重要性を増していく。言うならば、理性は人間を理性的に探求していくことで、自らのよって立つ基盤を掘り崩していく。ヒュームの懐疑論はこのようなものとして理解できる。ヒュームはこの懐疑論から抜け出るために、人間本性への信頼という自然主義的立場を取る。そして、その過程において、ヒュームは理性の役割の最小化と情念の役割の最大化を行う。ヒュームのこのような結論は人間本性に関する理性的探求のありうべき帰結であるが唯一の帰結であるとは限らない。そもそも情念は理性の対立項としてのみ探求の主題としての重要性を持つものであるのか。情念の探求の持つ可能性は十分に明らかになっていると言えるだろうか。ヒュームのような立場のみが、情念を人間本性の内てで説明する唯一の方策であるとは限らない。

以上の問題設定の背景と研究者自身の『人間本性論』の翻訳に伴って進めてきたヒューム情念論の理解、すなわち、観念説を前提とした、情念の生成に関する因果的機構の解明と、その理論が現実の諸現象に対してどれほどの妥当性を持ちうるものなのかの検証を主たる目的としているという明らかにされたことの二つを前提に考えた場合、まず情念そのものに関して、理論レベルに先行して、日常レベルでどう理解されているかをはっきりさせる必要がある。しかし、日常的な情念の理解といっても、これ自身決して理論的に生のデータであると考えすることはできない。このような情念のあり方をよりよく理解するためには、英国の歴史的伝統と他の哲学者たちとの影響関係において、ヒューム哲学を見直すことによって、最も良く果たされるであろう。

すなわち、本研究の目的は、ヒューム哲学を出発点において、その情念論をよりよく理解するために、彼が前提としている情念という現象について、当時の哲学者たちがどう考えていたかを、ヒュームとの影響関係において整理して、より明晰な理解にたどり着くことを目的として、また同時に情念という主題の探求が、哲学的探求においてどのような可能性を持ちうるかを当時の哲学者の考えに

即して、考えてみることである。

## 3. 研究の方法

以上の課題すなわち、ヒューム情念論それ自体をよりよく理解することと、当時の英国哲学の人間本性論における情念の役割の可能性を探るという二つの意味において、以下の三つのグループの哲学者の説を検討する。第一は利己心を人間本性の中心におく人々であり、マンデヴィルをその代表として取り上げる。第二は慈愛を人間の基本感情として認め、それによって道徳の起源を説明する道徳感情論者であり、ここでは主としてハチスンを取り上げる。第三は理性を人間本性の中核におくスコットランド常識学派のトマス・リードである。

これらの哲学者は情念そのものを探求の主題としているというより、自らの道徳論の主張のために情念を説明の道具としているので、出来る限り情念論それ自体を、彼らの道徳に関する哲学的主張と切り離して取り出す努力を行う。その上で相互の比較検討を行い、それらの理論の異同の中に、それぞれの人間本性に関する考えを明らかにする。

そして、それらの哲学者の考えをヒュームの哲学を中心に配置して、見て取ることによって、18世紀英国哲学の情念論の全体的構図を描くことが出来、さらに今まで十分に明らかにしてきたとは言えなかったヒューム情念論の哲学史的意義の理解も同時に深めることが期待できる。

この課題の達成のためには、まず各哲学者のテキストそのものを収集し、情念に関する部分を取り出し理解する必要がある。そのようなデータを集積した上で、現代の心の哲学において展開されている感情に関する考えも参照しつつ、情念論の十分な理解を目指し、それらをヒューム情念論と比較することによって、上記の目的を果たすだけでなく、18世紀英国という時代的制約を超えて、本研究のテーマが普遍的価値を持つものであるかどうかを明らかにすることが出来るであろう。

## 4. 研究成果

まず3において記した、三つのグループの哲学者たちの情念論に関して以下のような事柄を明らかにすることが出来た。

第一のマンデヴィルだが周知のように、彼は「私的な悪徳すなわち公的な利益」と述べたことで当時の思想界に大きな波紋を呼び起こした。彼の思想は当時に存在していた個人の美德と言う考えと社会の経済的繁栄を目指すという考えの間にある懸隔を指摘し、それに気づかずに、従来からの美德を主張しつつ、社会的な繁栄を享受していた人々の偽善性を浮き彫りにした。このような、社会思

想史において重要な意義を持つ、マンデヴィルの人間本性と情念に関する考えは要約すれば以下のようなものであった。

彼の議論は、情念を直接論じるものというよりは、道徳の起源をめぐる問題とりわけ、道徳的行為がどのような動機に基づいて行われるかを問題とする。そして、その際論敵として思い描いているのはシャフツベリーである。シャフツベリーの議論は、人間本性は社会的であり、契約論者が念頭においているような独立した個人ではない。社会的な活動は人間本性に根ざしたものであり、従って他者と善き関係を築き、自分の属する共同体を愛するという美德とされる事柄は人間の本性に起源を持つというのである。利己主義者は、この点を認めず、人間本性の社会的な欲求を満足させることが、人間の幸福の大きな要素であることを理解しないという。マンデヴィルの議論もシャフツベリーのこの議論の範疇に入る。

彼も含めて利己主義者の議論は、すべての欲求は、欲求主体の満足を求めるが故に利己的であるという論点と、自己愛のみが他の欲求を圧して強力であるという必ずしも整合的ではない主張の組み合わせであるが、最終的には前者のどのような行為もその欲求は自分の欲求の満足であるが故に欲求の満足以に帰着するという主張である。純粹に理論的言説としてみた場合、マンデヴィルはシャフツベリーの理論的不都合を批判しているのではなく、シャフツベリーの言うような人間だけであれば、繁栄する社会と言う目的が実現できないということが議論の要点である。すなわち、世俗的な成功を目指す社会に適合的なタイプの間観を提示していると見なすことが出来る、こうして見たときに、社会思想史の重要性はともかく、情念そのもの見方としては平板であると言わざるを得ない。ただし、このような利己的な人間の感情が、一種の道徳的な見かけを獲得していく過程を自然私的な進歩の過程として描いていることは、重要な視点と言わなければならない。

第二にシャフツベリーの後継者でありマンデヴィルの批判者であることを自認するハチスンの議論を考察すると次のようになる。本研究においては特に、マンデヴィルに関する言及の多い『笑いについての考え、および『蜂の寓話』』についての意見を述べた6通の手紙』を検討した。

特に笑いという直接には自己利益に結びつかないように思われるが、しかし、人間の感情生活においてはきわめて重要に思われる情念についての利己主義者の説明が、きわめて一面的であり、不自然であることを指摘する。さらにハチスンの『蜂の寓話』の議論を分析することによって、マンデヴィルの主

張の持つ説得力が論理的な整合性を犠牲にしたレトリックにあり、ある意味で論理的な批判が不可能な書物であることを示す。

このようなマンデヴィルの議論の不自然性に比べれば、ハチスンの示す情念の姿は遙かに穏当である。しかし、ハチスンは一方で、すべての行為が欲求の満足に基づくという利己主義者の行為論を承認しているのだから、利己主義者を完全に論駁するにはいたらず、結局において、利己的な情念と社会的な情念のバランスが実際にどうなっているかという問題に両者の相違は帰着する。

さてこのような、論争とヒュームの情念論の関係はどのようなものであろうか。

ヒュームが人間本性論を觀念説を基礎に人間の精神の働きを因果的に探求していることはこれまでに研究者が明らかにしたことであった。そしてその内在的な理解と難点の指摘は、『人間本性論』第二巻の解説において詳しく述べた。前者の論争の提示において明らかになったのは、ヒュームのこの方法が、情念をめぐるこの論争においてもった意味合いである。この論争は、結局においてそれぞれが持つ人間観の相違に依存しており、両者をいわば共通の土俵の上で考える、理論的な基盤がかけている。そして、ヒュームの情念論はある意味でその理論的基礎を提供していると考えることが出来るのである。いやこの論争ばかりでなく、情念を論ずる際には知性を論じる際の觀念説の役割を果たすような基盤がなかったのである。ヒュームが情念をあえて觀念説という基盤にのせたのはそういう意味があったと推測できる。

そして、ヒュームが特に強調した共感というメカニズムによって、上記の論争はこのように調停されることになる。共感とは、他人の気持ちそのものが自分の気持ちとなり自分を動かすことである。ヒュームはこのことによって、最終的には人間の行為の動機が個々人の持つ欲求であると言う、利己主義者たちの持つ行為の理論を受け入れつつ、他者の気持ちや、いわば人間の自然本性的に関与してくるメカニズムとして想定されている。すなわち、シャフツベリーやハチスンが、人間の本性的に持つ社会的な情念として理解していたことについて、その理論の中に取り入れる装置なのである、ヒュームはこの共感によって、人間の持つ社会性という利他主義者の主張を、利己主義者のようになり人為的な説明に頼ることなく、最終的な行為の動機が個々人の快不快によるという行為の理論を結びつけているのであり、利他主義者の言う人間の社会性を巡る議論をさらに進めているのである。

最後に、ヒュームの批判者である、トマス・リードの議論であるが、他の三者との関係で問題になるのは、彼の行為の理論である。

リードは人間の行為に影響を与えるものを一括して「行為の原理」と呼ぶ。行為の原理は行為の原因とは明確に区別される、リードにとって、通常の意味での原因は必然性の支配下にあり真の原因は意志を持った行為主体のみである。行為主体は様々な原理に影響を受けるが、それによって決定されることなく行為の選択をする。情念も理性もこのような行為に影響を与える原理の一つである。

このようなリードの議論は現実の情念のあり方の理解に関しては、他の論者とそれほどかわるものではない。その意味で現実の情念お理解はある程度共通していると言える。しかし、にもかかわらず、彼のヒューム批判のうち最も決定的に思われるのは、彼の議論によれば、彼が自分の道徳論の基礎において、理性と情念の区別とりわけ理性に行為への影響力を認めないで情念にのみ認めている点にあるように思われる。ヒュームのような精神現象に関する因果論を認めるとするならば、理性に対して因果性を認めないのは根拠のないことのように思われる。しかし、もし理性に因果性を認めるとすると、ヒュームの道徳論はそのもっとも大きな根拠を失う。しかし認めなければ、ヒュームの因果論は不徹底であることになる。リードのヒューム批判は、ヒュームの自然主義の新たな可能性を示唆するとともに、実際の限界を見定めた別の可能性を示すものである。

このように、リードの議論は18世紀英国の情念論の持つ可能性が、きわめて大きいものであることを示しているのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①石川徹 「トマス・リードの心の哲学 (6) 道徳的行為者の自由について (上)」 査読無 香川大学教育学部研究報告第一部 133号 81-88 2010年3月

②石川徹 「トマス・リードの心の哲学 (7) 道徳的行為者の自由について (下)」 査読無 香川大学教育学部研究報告第一部 135号 59-72 2011年3月

③石川徹 「ヒュームの自己吟味の意味するもの」 査読有 『アルケー』関西哲学会年報 20 1-8 2012年6月

〔学会発表〕(計1件)

① 石川徹 「情念論とヒュームの自己理解」 シンポジウム課題研究 ヒューム生誕300年 関西哲学会64回大会 2011年11月 龍谷大学

〔図書〕(計2件)

訳書 ①デイヴィッド・ヒューム『人間本性論』 第二巻情念について 石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦 訳 法政大学出版局 2011 386 同書所収

解説論文 石川徹 ヒューム「人間本性論」における情念論 225-356

②デイヴィッド・ヒューム『人間本性論』 第三巻 道徳について 伊勢俊彦・石川徹・中釜浩一 訳 法政大学出版局 2012 344

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石川 徹 (ISHIKAWA TORU)  
香川大学・教育学部・教授  
研究者番号：30212848